

古平の記憶を、未来の資源へ



森 雅人（もり まさと）さん 古平町観光協会事務局長

1957年、北海道増毛町生まれ。専門は地域社会学・民俗学・観光学。元札幌大谷大学教授。2023年より古平町地域おこし協力隊（魅力発掘推進員）第一号隊員。NPO法人じもつ理事長。2026年4月より古平町観光協会事務局長。

元稲倉石鉱山で働かれていた木村さんと鉱石コレクションを持つ森さん

北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域力創造アドバイザー（総務省）のかとうけいこさん。40回目となる今回は、古平町に1ターンし、古平町第一号の地域おこし協力隊員として3年間の活動を終え、この4月から古平町観光協会事務局長となった森雅人さんに伺いました。研究者から実践者へその転換は、10年以上前から静かに準備されていた。

積丹半島に10年通われていたんですね

私の専門分野は地域社会学、民俗学、観光学の三領域です。毎年のように学生を連れて積丹・古平を歩い

ていました。三平汁や飯寿司などのレシピを掘り起こし、ニシン番屋で郷土料理を再現し、お祭りを通じて地域の深層を読み解く研究室と現場を往復するフィールドワークを積み重ねてきました。

古平町は、故郷・増毛町と似た風土があり、札幌からの近さ、そして定年というタイミング。研究者としての変なプライドはありませんでした。もう少し地域と深く関わりたかった。何かできるはずだと考えていましたね。

地域おこし協力隊の3年間はいかがでしたか？

協力隊としてのミッションは「魅力発掘推進員」でした。役場に席を置き、住民との日常的なやり取りを重ねながら、「光が当たっていないもの、利活用が進

んでいないもの」を広報誌や活動を通じて発信し続けました。鉄鋼増産を支えた稲倉石鉾山の踏査、詩人・吉田一穂の資料デジタル化、琴平神社例大祭の存続を訴えるクラウドファンディングを2年連続で計130万円近くを集め、「地域おこし協力隊クラウドファンディングアワード2024」文化承継部門賞を受賞しました。一方でマウンテンバイク拠点化や廃鉾山活用など、実現できなかった構想も山ほどあります。

経営されている民泊について教えてください

失敗を恐れず挑戦できる環境のなかで、2年目からは、できることからやろうという考えに変わりました。その第一弾が古平で最初の民泊「じもつ FURUBIRA」。ありがたいことに今では年間60組・約120人が利用し、外国人長期滞在者には地元の飲食店や祭りを個別に案内し、民泊は単なる宿泊施設ではなく「古平の入口」として機能しはじめました。

宿泊客の75パーセントが外国人。スイス、ドイツ、オーストラリア、アメリカなど英語を話す方がほとんどです。なかには1か月滞在した旅人もいます。小さな漁村、人口約2,400人の古平町に多くの外国人が引き寄せられる理由は、神威岬やニセコ、余市、小樽が1時間圏内に収まる地の利があります。そこにある長期滞在できる民泊は旅人にとって魅力的なようです。

アキアジ地蔵を核にした体験プログラムとは？

驚いたのが、アキアジ地蔵です。漁師たちが安全操業を祈った地蔵でありながら、その由来が地域のなかで十分に共有されていなかったのです。生活から生まれた信仰が、生活から切り離されていた。そこでその物語を郷土史料から掘り起こし、10枚の紙芝居に仕立てました。絵はAIを活用し、語り部を立て、お寺の集まりで披露しました。

この手法は体験観光へと連鎖しています。紙芝居でアキアジ地蔵の由来を知り、お参りをして、そば畑を眺め、そば打ち体験をし、鉾山石のアクセサリーをお土産に持ち帰る。ストーリー性がないとダメ。だから必ず歴史をわかりやすく伝えることと、食文化、お土

産をセットにしています。民俗資料室に眠る漁具・農具の記録冊子「古平の暮らしシリーズ」も同じ発想で作っています。

この取り組みが教育委員会の目に留まり、子どもたちやシニアクラブへの展開も始まりつつあります。民話・民具・生活文化を、地域の人が自分の言葉で語れるようにしたい。それが共感の基盤になるはずです。

事務局長として「調整する側」へ転換ですね

観光協会の事務局長就任は、予期していませんでした。退任後は集落支援員として自由に暮らそうと思っていたら、町長から声がかかりました。任意団体である観光協会が町の支援を受けつつ、観光に力を入れていこうとするタイミングでもありました。これからは、好き勝手はできなくなった。調整する側になりました。

遊漁船も、モノづくりをやっている人も、みんないる。これからは、それを結びつけていかないといけません。積丹町との広域連携も視野に、体験観光と関係人口の拡大を軸に据えています。ただし、強引には動きません。合理的な判断だけで人が動くわけではない。関係を築きながら、自分のやりたいことを進めるのがいちばん大切ですね。

知と地の基盤をつくる「古平学」について教えてください

はい。最終目標として「古平学」の構築があります。学術書を書くというより、地域住民が自らの歴史・自然・文化を語る「知の基盤」と、それを実装する「地の基盤」を同時につくりたいです。協力隊の後輩たちも心強い。民泊、^{たる}樽づくり、新規就農に20代から50代の隊員たちがそれぞれ会社を持ち、互いの活動を結びつけながら定着しています。地域の記憶を言葉に変え、地元の人たちに伝えていきます。地域を語れる人を増やさなければ。(2026年5月取材)

インタビュー後記

よく知る大学教授の森先生が地域おこし協力隊になられた時から、ずっと活動を遠くから拝見してきました。お祭り、民泊、そして観光協会事務局長。研究者の視点を持ちつつ実践者として地域の関係者と各地の専門家やプレイヤーをつなぐハブとして行動される姿に、力をいただきました。かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表